

中学生の自己概念と過剰適応（１）

—現実自己と理想自己と捉える２つの視点—

石津憲一郎

中学生の自己概念と過剰適応(1)

—現実自己と理想自己と捉える2つの視点—

石津憲一郎

Junior High-school Students' Self Concept and Over-adaptation : Two View Points for Ideal Self and Real Self

Kenichiro ISHIZU

キーワード : 理想自己, 現実自己, 重要な他者, 過剰適応

Keywords : ideal self, real self, significant others, over-adaptation

問題と目的

学校基本調査速報(文部科学省, 2010)によると, 平成21年度間の欠席者のうち「不登校」を理由とする児童生徒数は, 小学校約2万2千人, 中学校で約10万人であった。小学校および中学校に在籍する児童生徒数は減少の一途をたどりいずれも過去最低の在籍者数となっているが, 不登校生徒の割合はほぼ横ばいである。こうした現状に対し, 本邦においては90年代を中心に学校ストレス研究をはじめとする多くの研究が行われてきており, ストレスマネジメントやSSE(Social Skill Education)といった, 集団単位で実施可能な心理教育のアプローチの実践研究や効果研究も盛んに行われてきた。そしてその効果には一定の評価がなされているが, 不登校の増加傾向に対する決定的な歯止めには至っていない。

秋田県教育総合センター(1998)は, 不登校のタイプを「分離不安型」「よい子の息切れ型」「甘え依存型」といった類型に分類している。また, 小学生に多い「分離不安型」の不登校は中学生や高校生では著しく減少し, 「よい子の息切れ型」が最も多くなることが確認されている。これまで「よい子(いい子)」に関する実証研究として, 「いい子」傾向の中学生のself-controlと対人関係満足度の関連を調べたものに庄司・林田(2003)がある。庄司・林田(2003)は「いい子」傾向を「主張抑制」と「他者迎合」の2因子に分類し, self-control, 社会的スキル, ソーシャルサポート, 対人関係満足度との関連をそれぞれ検討した。その結果, 「いい子」傾向の「他者迎合」が強いほど, 促進的なself-controlを行い, 他者と関わるときに共感・同調し, 否定的行動をとらず, したくないことをする傾向が高くなった。社会的スキルと, 「主張抑制」「他者迎合」との関係は, 「主張抑制」が負の相関を持つのに対し, 「他者迎合」は正の相関を持つことが明らかにされている。さらにソーシャルサポートとの

関連性では, 「他者迎合」とソーシャルサポートが正の相関を示したのに対し, 「主張抑制」は負の相関を示した。このように「よい子」の社会的スキルや他者に対する共感性は必ずしも低いとは限らず, 学校内で不適応を起こしていると他者から認知されない可能性が考えられる。また, 石津(2006)は「両親や友人, 教師といった他者から期待されている役割・行為に対し, 自分の気持ちは後回しにしてでもそれらに答えようとする傾向」を過剰適応傾向と定義し, 上述のよい子傾向を含む過剰適応尺度を構成した。この尺度は「自己抑制」「自己不全感」「他者配慮」「期待に沿う努力」「人からよく思われたい欲求」の5因子から構成され, 心身の健康との関連が検討されてきた。これまで, 過剰適応傾向の高い中学生は学校適応感が平均値程度に保たれる一方で, 高いストレス反応を示すこと(石津・安保, 2008)や, 子どもが過剰適応的にふるまうことによって客観的(社会的)適応と個人の苦悩とが乖離していく可能性(石津・安保, 2007)が示されている。以上の先行研究からは, 「よい子」や過剰適応の子どもは周囲から, 不適応を起こしているとは捉えられにくく, 突然「息切れ」を起こすと判断されることが想定される。先ほどの「よい子の息切れ型」不登校にみられる苦悩としては, 周囲の期待に沿ったつくられた自我であり, 本来の自我とは異なるために, 周囲からの期待やそれに沿った自己イメージに感じられなくなったことによる不適応であるとされる(秋田県教育総合センター, 1998)。

さて, 現実の自分と理想の自分とに差が大きい者ほど適応が低いとする実証研究は, Rogers(1951)による実証研究を始め多く蓄積されてきた。現実自己(real self: 私は～である)と理想自己(ideals self: 私は～になりたい), またその差異(self-discrepancy)をより精緻に調べようとしたのがHiggins(1987)である。Higgins(1987)は, 社会心理学的な立場から, 理想自

己と現実自己の不一致は抑うつを、当為自己（私は～になるべきである）と現実自己の不一致は不安を喚起させることを示した。このHiggins（1987）やMoretti & Higgins（1990）の研究以降、この種の不一致は、自己受容の低下や自尊感情を脅かす要因として、本邦においても多くの研究が行われてきている。近年では、理想自己を正の理想自己と負の理想自己に分類し、「こうありたくない」という負の理想自己と現実自己のズレが自尊感情をより説明することや（遠藤，1992a），自分にとっての重要な側面における不一致は自尊感情を低下させるが，自分にとって重要でない側面における「不一致」は自尊感情との関連が弱いことが示されている（遠藤，1992b）。また，「不一致」の影響を強める要因として，公的自意識（伊藤，1992）や不合理な信念（新井，2001）などが検討されている。

ところでHiggins（1987）は，「理想自己」「現実自己」「当為自己」の3種類の自己概念に対し，「自己観点」と「重要な他者観点」の2つの視点を設けている。例えば，自己視点の現実自己は“わたしは～な人間である”という自己認知であるのに対し，他者視点の「理想自己」とは“（他者が私に）こうなってほしいと願う像”（Higgins，1987）である。したがって他者視点の理想自己は，実質的には「ある他者から期待されている（と感じる）自己像」ということになる。上述したように，中学生の不登校は，周囲の期待に沿ったつくられた自我と現実自己がそぐわず，そうした自我に現実的に応じられなくなることと関連することが予測されている。しかし，これまで国内外でこの「重要な他者観点」を含めたself-discrepancyの実証研究は多くない。それは自己視点の理想自己を形成する上で，私たちは重要な他者視点を無意識に取り入れているからとも考えられる。それでも，Moretti & Weibe（1999）は，特に女兒において，親の価値観と現実自己が離れていると，内面的苦悩も行動上の問題も増えることを指摘している。また，Harter，Brensnick，Bouchey & Whitesell（1997）は，他者が自分に対して抱く視点到過剰に依存しないことが，特に思春期の女子にとっての自尊心や抑うつ傾向に大切であることを指摘している。こうした指摘の一方で，過剰適応傾向が高い者の行動や思考の判断基準には「他者の視点」が常に念頭に置かれており，Harter et al（1997）が指摘する，“他者視点到過剰に依存している可能性”が過剰適応の子どもたちにはあてはまる可能性がある。

それでは，こうした過剰適応の子どもたちは，どのような現実自己と理想自己をもっているのだろうか。これまで本邦において，思春期の子どもを対象とした自己概念に関する理想と現実を扱った研究は多くない。また，現実自己にも理想自己にも，それぞれ「自己視点」と「重要な他者視点」があるとすれば，それぞれの視点の現実と理想自己をどのように認知しているのだろうか。本研究ではこうした過剰適応の子どもたちの理想自己と現実自己

の認知のあり方や，その差異について検討することを目的とする。

方法

調査協力者

調査結果に著しい回答ミスがなかった北陸地方の中学生308名（1年生106名，2年生91名，3年生111名；男子154名，女子153名，不明1名）を分析の対象とした。平均年齢13.54，標準偏差は.97であった。また著しく回答が欠損している者は分析の対象から外したが，データ数を勘案し，以下の分析では欠損値には系列平均値をあてはめてから分析を行っている。

測度

- ①フェイス・シート：学年，年齢，性別を尋ねた。また，回答は無記名で行われ，すべて数値化されて分析されるため，個人を取り上げることがないこと等を明記した。
- ②自己概念：「成績」「運動」「社会性」「暖かさ」「容姿」「勤勉」「従順」についてそれぞれ3項目ずつ作成した。作成に当たっては，まず大学生100名に中学生のころ思い出してもらい，その時に「なりたと思っていた自己像」と重要な他者から「なってほしいと期待されていると感じた像」を自由記述で回答を求めた。それらをKJ法で分類し，最終的に上記の7領域21項目を作成した。今回作成された領域としては，外山・桜井（2001）の5領域（「社交性」「知的能力」「調和性」「誠実性」「身体的望ましさ」）や，伊藤（1992）の6領域（「社会性」「情緒安定性」「意欲・強さ」「まじめさ」「敏感性」「理性性」）と類似していた。回答は，“自己視点”と“重要な他者視点”についてそれぞれ「現実」と「理想」を5件法で尋ねた。
- ③過剰適応：石津（2006）による青年期前期用過剰適応尺度を用いた。この尺度は「自己抑制」「自己不全感」「期待に沿う努力」「他者配慮」「人からよく思われたい欲求」の5因子から構成されている。回答は5件法で求めた。
- ④学校不適応：ストレス反応と学校ぎらい感情を用いた。ストレス反応は三浦・福田・坂野（1995）と岡田（2000）から身体的反応，怒り，不安，悲哀について4件法で回答を求めた。学校ぎらい感情は，古市（1991）による学校ぎらい感情尺度の12項目を用いた。回答は5件法で求めた。

なお，本研究では，紙面の都合により，②と③について分析し，考察を行うこととする。

結果と考察

1) 尺度の因子分析

まず，今回構成した自己概念を測定する21項目について

て領域ごとに分類可能かを確認するため主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。なお、得点は自己評価の現実自己を用いた。その結果、「親や大人に反抗しない」といった従順にあてはまる項目の因子負荷量が低かったため、これら３項目を除外し６因子解を改めて求めた（Table1）。各因子の α 係数は.75～.90であり、全体の α 係数は.90であった。このことからある程度の内的一貫性が確認された。また、因子の累積寄与率は６因子で64.74%であった。

続いて過剰適応尺度33項目を主因子法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ、先行研究と同様の５因子解が得られた。因子は第一因子から順に、「人からよく思われたい欲求」「自己抑制」「自己不全感」「他者配慮」「期待に沿う努力」であった。各因子の α 係数は.79～.83、33項目全体での α 係数は.91であり高い内的一貫性が認められた。

Table1 自己概念の因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	共通性
<成績$\alpha=.90$>							
成績が良い	.89	.01	.00	.04	.05	.13	.82
頭の良い	.84	.13	-.05	.04	.07	.14	.75
勉強ができる	.80	.00	.12	.12	.15	.17	.73
<運動$\alpha=.86$>							
運動神経が良い	.05	.86	.10	.10	.21	.05	.81
スポーツができる	.03	.82	.22	.13	.25	.18	.83
得意な運動がある	.09	.58	.35	.17	.10	.24	.57
<社会性$\alpha=.81$>							
誰とでも気軽に話せる	-.04	.23	.77	.13	.09	.19	.70
人とうまくつきあえる	.04	.07	.70	.27	.19	.14	.63
友達が多い	.07	.20	.61	.19	.21	.13	.51
<暖かさ$\alpha=.75$>							
親切である	.18	.08	.15	.69	.19	.10	.58
思いやりがある	.10	.18	.32	.60	.20	.25	.61
素直である	-.05	.12	.19	.56	.11	.24	.44
<容姿$\alpha=.78$>							
見た目（外見やすがた）が良い	.15	.20	.21	.16	.84	.11	.85
スタイルが良い	.18	.32	.11	.29	.58	.09	.58
おしゃれである	.02	.20	.29	.13	.47	.20	.40
<勤勉性$\alpha=.75$>							
まじめにがんばれる	.34	.13	.18	.31	.09	.70	.76
けじめをつけられる	.20	.16	.23	.17	.19	.60	.54
努力を続ける	.26	.24	.25	.31	.13	.51	.55
因子寄与率（%）	13.81	12.20	11.65	9.45	9.16	8.47	

行った¹。その結果、先行研究と同様に４つのクラスタが抽出された。クラスタの特徴は以下に示す。

- CL1(N=58)：内的側面も外的側面も低い「非過剰適応群」
 CL2(N=63)：内的側面も外的側面も高い「過剰適応群」
 CL3(N=104)：内的側面が低く、外的側面が平均程度の「適応群」
 CL4(N=83)：内的側面がやや高く、外的側面がやや低い「適応あきらめ群」

各クラスタの内的側面と外的側面のz得点をTable2に示す。

続いて、各クラスタの現実自己得点に違いがあるかを検討するため、クラスタ群を独立変数、６つの領域の現実自己を従属変数とした分散分析を行った。その際、他者視点の理想自己は実質的には期待される自己像であることから「被期待自己」と記すこととする。

まず、現実自己の６つの領域について、分析を行ったところ、６つの領域すべてにおいてクラスタの主効果が有意であった（ $F(3,304)=6.47 \sim 16.87, p<.01$ ）。Bonferroni法による多重比較を行ったところ、「成績」と「社会性」においてはCL3がCL1、CL2、CL4よりも高かった。また「容姿」「勤勉」についてはCL3がCL1とCL4よりも、「運動」についてはCL3がCL4よりも高かった。「暖かさ」についてはCL2とCL3がCL4よりも高いことが示された。以上から、相対的にCL3が最も高く、CL4が全般的に低く現実自己を見積もっていることが示された（Table3）。

続いて、理想自己の６領域について分析を行った。その結果、６つの領域すべてにおいてクラスタの主効果が有意であった（ $F(3,304)=7.05 \sim 15.44, p<.01$ ）。Bonferroni法による多重比較を行ったところ、「成績」「社会性」「暖かさ」「容姿」「勤勉」において、CL2とCL3がCL1とCL4よりも高く理想を見積もっていた。「運動」においてはCL2がCL4より、またCL3がCL1とCL4よりも高かった（Table4）。

Table2 各クラスタの特徴

	CL1	CL2	CL3	CL4	F値	多重比較 (Bonferroni)
内的側面	-.87(.73)	1.23(.67)	-.64(.49)	.47(.55)	188.62**	2>4>1,3
外的側面	-1.43(.64)	1.09(.53)	.36(.60)	-.27(.45)	230.73**	2>3>4>1

２）過剰適応傾向の高い者の現実自己と理想自己の特徴

まず、石津・安保（2008）に倣い、過剰適応傾向の高い者を抽出するため過剰適応尺度の高次因子の得点をz得点化したうえでK-means法によるクラスタ分析を

¹ 過剰適応尺度の下位尺度のうち、「自己抑制」「自己不全感」はよい子に特徴的な性格特性としての“内的側面”，「他者配慮」「期待に沿う努力」「人からよく思われたい欲求」は他者志向的な適応方略としての“外的側面”となる。それぞれの“側面”は高次因子として確認されている（石津・安保，2008）。

Table3 クラスタ別“自己視点”の現実自己得点

	CL1	CL2	CL3	CL4	全体	F値	多重比較(Bonferroni)
現実自己 成績	6.27 (2.36)	6.40 (2.74)	7.80 (2.61)	6.41 (2.46)	6.85 (2.63)	7.28 **	CL3>1,2,4
現実自己 運動	8.67 (3.34)	9.14 (3.55)	9.92 (2.80)	7.98 (2.77)	9.00 (3.14)	6.47 **	CL3>4
現実自己 社会性	9.60 (2.23)	9.24 (3.18)	11.10 (2.21)	8.66 (2.26)	9.78 (2.64)	16.87 **	CL3>1,2,4
現実自己 暖かさ	8.29 (2.20)	9.14 (2.70)	9.39 (1.90)	8.11 (1.77)	8.79 (2.18)	7.41 **	CL3>1 CL2,3>4
現実自己 容姿	6.22 (2.29)	6.78 (2.77)	7.67 (2.17)	6.25 (2.15)	6.83 (2.40)	7.61 **	CL3>1,4
現実自己 勤勉	8.34 (2.76)	8.74 (2.86)	9.82 (2.50)	7.99 (2.11)	8.83 (2.66)	8.89 **	CL3>1,4

** $p<.01$

()は標準偏差

Table4 クラスタ別“自己視点”の理想自己得点

	CL1	CL2	CL3	CL4	全体	F値	多重比較(Bonferroni)
理想自己 成績	12.70 (2.51)	14.28 (1.31)	14.06 (1.32)	13.26 (2.29)	13.63 (2.11)	10.15 **	CL2,3>1,4
理想自己 運動	12.75 (2.50)	13.70 (1.65)	13.99 (1.37)	12.63 (2.56)	13.33 (2.11)	9.22 **	CL2>4 CL3>1,4
理想自己 社会性	12.70 (2.24)	14.14 (1.29)	14.08 (1.21)	12.96 (1.77)	13.53 (1.73)	15.44 **	CL2,3>1,4
理想自己 暖かさ	11.93 (2.54)	13.53 (1.65)	13.54 (1.82)	12.30 (2.15)	12.90 (2.14)	12.35 **	CL2,3>1,4
理想自己 容姿	11.40 (2.84)	12.72 (2.43)	12.85 (2.09)	11.57 (2.75)	12.21 (2.57)	7.05 **	CL2,3>1,4
理想自己 勤勉	12.11 (2.46)	13.85 (1.43)	13.79 (1.54)	12.70 (2.04)	13.19 (1.99)	14.69 **	CL2,3>1,4

** $p<.01$

()は標準偏差

他者視点の現実自己（重要な他者が、現在の自分をどう見ていると推測するか（他者自己²⁾）と被期待自己においてもこれまでと同様に、クラスタを独立変数、6つの領域を従属変数とした一元配置分散分析を行った。他者自己では6つの領域すべてにおいてクラスタの主効果が有意であった ($F(3,304)=5.34 \sim 13.83, p<.01$)。また被期待自己においては「成績」を除く5領域においてクラスタの主効果が有意であった ($F(3,304)=4.58 \sim 7.51, p<.01$)。他者視点の現実自己6領域における多重比較の結果、「成績」「社会性」「暖かさ」「容姿」「勤勉」においてはCL3がCL1, CL2, CL4より、「運動」ではCL3がCL4よりも高い得点を示していた (Table5)。被期待自己の5領域では、「運動」「社会性」でCL3がCL4よりも高いことが示された。「暖かさ」「容姿」「勤勉」においてはCL3がCL1とCL4よりも高かった (Table6)。

これまでの結果から、過剰適応群は現実自己における

「暖かさ」は適応群と同じ程度に高く見積もる一方、「社会性」は適応群よりも低く見積もることが示された。他者志向性やよい子傾向を内包する過剰適応群は、「暖かさ」の自己認知は高くなる一方で、他者に合わせ過ぎてしまうために「社会性」を低く見積もっていたと推察できる。また、過剰適応群は「暖かさ」について現実自己は適応群と同等であったが、他者自己は適応群よりも低い値となった。これは、自分で思っているほど他者から「暖かさ」を認めてもらえていないと感じていることを示唆していると考えられる。つまり、過剰適応群の子どもは、自分で思っているよりも他者から評価されていないという感覚をもっていることも推察できる。

²⁾ 「自分にとって重要な他者が自分をどう思っている」と推測するか」は椎野(1966)に基づき、以下「他者自己」と記述する。

Table5 クラスタ“他者視点”の現実自己得点（他者自己得点）

	CL1	CL2	CL3	CL4	全体	F値	多重比較(Bonferroni)
他者自己 成績	7.13 (2.81)	6.97 (3.23)	8.77 (2.92)	7.34 (2.84)	7.71 (3.03)	6.98 **	CL3>1,2,4
他者自己 運動	8.60 (3.15)	9.18 (3.93)	9.90 (2.93)	8.10 (2.84)	9.02 (3.24)	5.34 **	CL3>4
他者自己 社会性	9.51 (2.66)	9.09 (2.95)	11.09 (2.42)	8.90 (2.42)	9.79 (2.74)	13.83 **	CL3>1,2,4
他者自己 暖かさ	8.50 (2.34)	8.55 (2.73)	9.81 (2.27)	8.43 (2.11)	8.93 (2.42)	7.27 **	CL3>1,2,4
他者自己 容姿	6.80 (2.18)	7.11 (2.75)	8.22 (2.42)	7.15 (2.53)	7.44 (2.53)	5.50 **	CL3>1,2,4
他者自己 勤勉	8.35 (2.69)	8.32 (3.24)	9.75 (2.79)	7.93 (2.55)	8.70 (2.90)	7.56 **	CL3>1,2,4

** $p<.01$

()は標準偏差

Table6 クラスタ“他者視点”の理想自己得点（被期待自己得点）

	CL1	CL2	CL3	CL4	全体	F値	多重比較(Bonferroni)
期待自己 成績	12.95 (2.40)	13.18 (1.89)	13.28 (1.95)	12.60 (2.21)	13.01 (2.11)	1.75	
期待自己 運動	12.20 (2.40)	12.07 (2.06)	12.93 (1.96)	11.80 (2.42)	12.31 (2.23)	4.58 **	CL3>4
期待自己 社会性	12.57 (2.34)	12.93 (2.03)	13.37 (1.81)	12.28 (2.29)	12.84 (2.13)	4.59 **	CL3>4
期待自己 暖かさ	12.41 (2.36)	12.93 (1.98)	13.46 (1.65)	12.24 (2.03)	12.83 (2.03)	6.96 **	CL3>1,4
期待自己 容姿	10.97 (2.72)	11.23 (2.15)	12.14 (2.04)	11.04 (2.34)	11.44 (2.33)	5.11 **	CL3>1,4
期待自己 勤勉	12.79 (2.13)	12.88 (2.14)	13.59 (1.63)	12.22 (2.10)	12.93 (2.03)	7.51 **	CL3>1,4

** $p<.01$

()は標準偏差

また、理想自己を非過剰適応や適応あきらめ群よりも高く見積もっていた過剰適応群と適応群だったが、被期待自己（他者視点の理想自己）では過剰適応群はどの群とも有意な差が見られなかった。過剰適応群は他者の期待に対して敏感であると想定されていたが、他者からの期待そのものが他の群と比べて大きいものではなかった。ただし、他者自己得点は適応群よりも低く、被期待自己と他者自己との間の差異は、適応群と比べると大きくなることも想定できる。以下の分析では、こうした現実と理想、現実と期待の差異について検討を行う。

3) 過剰適応傾群の現実自己と理想自己、および現実自己と被期待自己の差異

自己視点と他者自己を基準とし、理想自己、被期待自己との差異に、クラスタによる違いがみられるかを以下

に検討した。まず、現実自己と理想自己の差異得点（理想自己得点から現実自己得点の差）を算出した。なお、この差異得点がマイナスになる者はいなかった³。クラスタを独立変数、現実と理想の差異得点を従属変数とする一元配置分散分析を行ったところ、「成績」「社会性」「勤勉」においてクラスタの主効果がみられた($F(3,304)=4.12 \sim 9.61, p<.01$)。Bonferroni法による多重比較の結果、「成績」と「勤勉」ではCL2がCL1とCL3よりも差異得点が大きかった。また「社会性」ではCL2がCL1とCL3よりも、CL4がCL3よりも高い差異得点を示した(Table7)。続いて、現実自己と被期待自己の差異得点を算出した。

³ 理想自己得点と現実自己得点が等しい場合（理想と現実が完全に一致する場合）はあり得るが、理想を現実が上回することは通常考えられない。

Table7 クラスタ別の“現実自己と理想自己の差異”得点

	CL1	CL2	CL3	CL4	全体	F値	多重比較(Bonferroni)
現実-理想 成績	6.46 (3.13)	7.92 (3.15)	6.28 (2.91)	6.92 (3.04)	6.82 (3.08)	4.16 **	CL2>1,3
現実-理想 運動	4.25 (3.02)	4.61 (3.32)	4.07 (2.57)	4.67 (2.94)	4.38 (2.92)	.84	
現実-理想 社会性	3.44 (2.38)	4.92 (3.14)	3.00 (2.08)	4.31 (2.35)	3.83 (2.56)	9.61 **	C2>1,3 CL4>3
現実-理想 暖かさ	3.78 (2.53)	4.50 (2.90)	4.20 (2.23)	4.19 (2.23)	4.18 (2.43)	.88	
現実-理想 容姿	5.21 (3.09)	6.01 (3.26)	5.18 (2.85)	5.31 (3.12)	5.39 (3.06)	1.11	
現実-理想 勤勉	3.83 (3.04)	5.30 (3.02)	3.99 (2.69)	4.76 (2.56)	4.44 (2.84)	4.12 **	CL2>1,3

** $p<.01$

()は標準偏差

Table8 クラスタ別の“現実自己と被期待自己の差異”得点

	CL1	CL2	CL3	CL4	全体	F値	多重比較(Bonferroni)
現実-期待 成績	6.71 (3.36)	6.82 (3.15)	5.61 (3.05)	6.27 (3.23)	6.24 (3.20)	2.48	
現実-期待 運動	3.73 (2.83)	3.31 (2.64)	3.43 (2.66)	3.97 (3.02)	3.61 (2.79)	.89	
現実-期待 社会性	3.45 (2.34)	3.98 (2.83)	2.68 (2.15)	3.91 (2.62)	3.42 (2.52)	5.32 **	CL2,4>3
現実-期待 暖かさ	4.22 (2.83)	3.99 (2.59)	4.09 (2.14)	4.23 (2.71)	4.13 (2.52)	.15	
現実-期待 容姿	4.76 (3.13)	4.51 (2.32)	4.55 (3.06)	4.81 (3.09)	4.66 (2.94)	.21	
現実-期待 勤勉	4.55 (3.22)	4.36 (2.78)	3.91 (2.56)	4.38 (2.95)	4.23 (2.84)	.67	

** $p<.01$

()は標準偏差

ここでもこの値がマイナスになった者はいなかった。クラスタを独立変数、期待と現実の差異得点を従属変数とする一元配置分散分析を行ったところ、「社会性」のみでクラスタの主効果がみられた ($F(3,304)=5.32$ $p<.01$)。Bonferroni法による多重比較の結果、CL2とCL4がCL3よりも高い差異得点を示すことが明らかとなった (Table 8)。

現実自己得点、理想自己得点、被期待自己得点においては多くの領域でクラスタの主効果がみられていたが、領域別の差異得点ではそうした主効果の数が少なくなった。ただし、「社会性」では“現実自己と理想自己”、“現実自己と被期待自己”のどちらの差異得点でも、過剰適応群と適応あきらめ群が適応群よりも高い差異得点を示していた。

過剰適応群は相対的に高い「社会性」を理想としていたが、一方で相対的に低く自分の社会性を評価していた。

こうした傾向がこの結果であると解釈できる。現実自己と理想自己の差異では、いずれも適応群や非過剰適応群と、過剰適応群との差がみられていた。適応群は、現実自己も理想自己も他の群と比べ高く見積もっていたため差異得点が低くなる一方、非過剰適応群はどちらもやや低く見積もる傾向があったため、結果として差異得点も低かったと推察できる。石津・安保 (2008) では、どちらも差異得点が低いこれら2つのクラスタをストレス反応と学校適応感の視点から比較している。それによれば、これら適応群と非過剰適応群はいずれもストレス反応が低いことを示している。また、適応群は学校適応感が高い一方で、非過剰適応群は学校適応感が低かった。こうした結果を踏まえた場合、理想と現実や期待と現実の差異が低い者は、ストレスは低いかもしれないが、低い理想自己は学校生活に対する目標を失わせてしまうかもしれない。こうした点は、今後も検討が必要である。

Table9 クラスタ別の“他者自己と理想自己の差異”得点

	CL1	CL2	CL3	CL4	全体	F値	多重比較 (Bonferroni)
他者自己-理想 成績	5.57 (3.59)	7.32 (3.66)	5.29 (3.24)	5.92 (3.59)	5.93 (3.55)	4.68 **	CL2>1,3
他者自己-理想 運動	4.41 (3.43)	4.52 (3.69)	4.09 (2.99)	4.53 (3.14)	4.31 (3.26)	.42	
他者自己-理想 社会性	3.19 (3.37)	5.06 (3.24)	2.99 (2.47)	4.07 (2.55)	3.74 (2.94)	7.99 **	CL2>1,3
他者自己-理想 暖かさ	3.43 (3.02)	4.98 (3.37)	3.73 (2.80)	3.86 (2.41)	3.97 (2.91)	3.56 **	CL2>1,3
他者自己-理想 容姿	4.60 (2.85)	5.61 (3.22)	4.63 (3.26)	4.42 (3.21)	4.77 (3.18)	1.97	
他者自己-理想 勤勉	3.75 (3.04)	5.53 (3.90)	4.04 (2.95)	4.77 (2.79)	4.49 (3.19)	4.26 **	CL2>1,3

** $p<.01$
()は標準偏差

Table10 クラスタ別の“他者自己と被期待自己の差異”得点

	CL1	CL2	CL3	CL4	全体	F値	多重比較 (Bonferroni)
他者自己-期待 成績	5.82 (3.60)	6.21 (3.60)	4.51 (3.62)	5.26 (3.56)	5.31 (3.64)	3.43 *	CL2>3
他者自己-期待 運動	3.59 (3.13)	2.90 (3.29)	3.04 (3.15)	3.70 (3.30)	3.29 (3.21)	1.15	
他者自己-期待 社会性	3.05 (3.07)	3.84 (2.84)	2.28 (2.82)	3.38 (2.77)	3.04 (2.91)	4.47 **	CL2>3
他者自己-期待 暖かさ	3.91 (2.99)	4.38 (2.92)	3.66 (2.60)	3.81 (2.90)	3.89 (2.82)	.88	
他者自己-期待 容姿	4.17 (2.78)	4.12 (2.78)	3.92 (3.14)	3.89 (3.16)	4.00 (3.00)	.16	
他者自己-期待 勤勉	4.44 (3.13)	4.56 (3.41)	3.84 (3.02)	4.29 (3.20)	4.22 (3.17)	.84	

** $p<.01$, * $p<.05$
()は標準偏差

続いて、他者自己と、理想自己、被期待自己との差異を検討した。他者自己は、“重要な他者が、現在の自分をどう見ていると思うか”という推測する他者視点を通じての自己イメージである。これまでと同様に、クラスタを独立変数、期待と理想の差異得点を従属変数とする一元配置分散分析を行ったところ、「運動」「容姿」以外の領域でクラスタの主効果がみられた ($F(3,304)=3.56 \sim 7.99, p<.01$)。多重比較の結果、有意差がみられたすべての領域で過剰適応群が適応群、非過剰適応群より高い差異を示していた (Table9)。同様に被期待自己との差異も検討したところ、「成績」と「社会性」においてクラスタの主効果がみられ ($F(3,304)=3.43 \sim 4.47, p<.01$) 多重比較の結果、過剰適応群が適応群よりも高

い差異を示した (Table10)。自分の理想や他者からの期待と、他者自己との差異は、特に他者の視線に敏感である過剰適応群で大きいものだった。すでに示されているように、過剰適応群は他者自己の得点が低かったため、期待や理想との差異が他の群と比べて大きくなったのだと推察できる。自己視点の現実自己と、他者自己のどちらが適応に影響するのかは今後の検討が必要であるが、少なくとも本研究では他者視点の現実自己と、理想や期待される自己との差異は適応群や非適応群よりも過剰適応群で大きく、“他者視点に過剰に依存することによる適応のリスク (Harter et al, 1997)”は過剰適応群で顕著になると考えられる。

4) 重みづけをした“現実自己と理想自己”，“現実自己と被期待自己”の差異

これまで、領域別の自己認知を過剰適応の視点から検討してきた。一方、「大事だと思う」「とてもそうになりたい」と思う領域や項目は個人間で異なることが想定される。たとえば、「おしゃれである」ことは重要視しないが「スポーツができる」ことは重要視する個人がいるならば、同じ理想と現実の差異であっても前者より後者の方が影響力を持つと考えられる。こうした“重みづけ”の視点は遠藤（1992b）によって検討され、個人にとって重要な項目間での差異はそうでない差異よりも自尊感情と強い関連をもっていた。そこで、ここではこの重みづけの視点を取り入れた差異について検討する。

重みづけをした差異得点を算出する前に、それぞれのクラスタ群がどういった項目を重要視しているのかを検討するため、理想自己と被期待自己において「とてもそうになりたい」、「（他者が）とてもそうなってほしい（と思っている）」⁴と回答された上位項目を列挙した。CL1では「スポーツができる」「得意な運動がある」の項目で「とてもそうになりたい」と回答された割合が50%を超えた。同様に、CL2では「成績が良い」「友達が多い」と言った項目などが上位であった。CL3では「友達が多い」「努力を続ける」などが、CL4では「頭の良い」「勉強ができる」などの項目が「とてもなりたいたい」と回答されたものの上位項目であった（Table11）。また、重要な他者が自分について「とてもそうなってほしい（願っている）」と回答された項目を、クラスタ別に列挙した（Table12）。CL1では「頭の良い」「勉強ができる」などが、CL2では「努力を続ける」「頭の良い」、CL3では「友達が多い」「努力を続ける」などが上位項目であった。CL4ではそうした項目が5割を超える項目がなかったが、「成績が良い」などが上位項目に挙げられた。

続いて、遠藤（1992b）に基づき、重みづけのある理想自己と現実自己の差異得点を算出するため、自己視点の理想自己において「とてもそうになりたい」と回答した理想自己の項目得点から現実自己得点を引いた得点の二乗を加算した。さらに、その得点を「とてもそうになりたい」と回答した項目数で除したうえでその平方根を算出し、重みづけのある理想自己と現実自己の差異得点を算出した。この場合、「とてもそうになりたい」と回答した数が個人間でばらつきがある場合でも、個人の重みづけされた差異得点が算出され⁵、個人にとって重要な項目での差異のみが算出されることとなる。同様の方法で、重みづけのある被期待自己と現実自己の差異得点や他者自己

と理想自己、期待自己の差異も算出した。最後に、重みづけのされた現実自己と他者自己の差異も算出した。

重みづけされた差異得点を従属変数、クラスタを独立変数とした一元配置分散分析を行ったところ、期待自己と他者自己の差異以外で、クラスタの主効果が有意だった（それぞれ $F(3,270)=8.18, p<.01$ ； $F(3,223)=4.71, p<.01$ ）。多重比較の結果、理想と現実の差異ではCL2とCL4がCL3よりも高い差異を示していた。また、期待と現実ではCL4がCL3よりも差異が大きかった。また、理想と他者自己においてもクラスタの主効果が有意であり $F(3,70)=9.77, p<.01$ ）、CL3が他のクラスタよりも差異が少なかった。重みづけされた現実自己と他者自己の差異では有意なクラスタの主効果は見られなかった（Table13）。

この結果からも適応群の差異は相対的に低いことが示された。また、過剰適応群は、理想自己と現実自己との差異が適応群よりも大きいことが示された。過剰適応群は他者からの期待に添おうと他者志向的な適応方略を取ろうとするため、被期待自己と現実自己の差異は他の群と変わらないのかもしれない。一方で、他者自己と理想自己との差異は高くなる傾向が示された。他者志向的な行動をとることで期待される自己にはある程度添えたとしても、個人の中の理想と現実の差異が小さくなるわけではなく、このあたりが過剰適応の苦悩と考えることもできるだろう。また、現実自己と他者自己のクラスタの主効果は見られなかったが、椎野（1966）によればここでの差異も社会適応に影響を与えることが示されており、クラスタ間の差は見られなくともその影響性は今後検討する必要がある。

本研究のまとめと今後の課題

本研究では、思春期における現実自己と理想自己およびその差異の特徴を、過剰適応の視点から検討した。過剰適応群から見た本研究結果を概観すると、過剰適応群は自己視点の現実自己については「成績」「社会性」以外では適応群と同等であり、理想自己も適応群との得点に差は見られなかった。しかし、「成績」「社会性」「勤勉」での理想と現実の差異得点において、適応群と過剰適応群には有意な差がみられた。また、重みづけのある理想と現実の差異でもこの2つの群に有意な差がみられた。この2つの群の特徴としては、上述したように理想自己と被期待自己の得点には差がみられず、また自己視点の現実自己も「成績」と「社会性」以外での差はない。しかし、この両群には上述した理想と現実の差異に加え、他者視点の現実自己得点にも差がみられていた。つまり、過剰適応群の子どもたちは、自分自身のことをさほど低くは評価していないものの、他者からは低く評価されていると感じていると思われる。中学生以降の不登校で特に増えてくる、「周囲の期待に沿ったつくられた自我と

⁴ いずれの回答も5件法で「5」と回答されたものである。

⁵ この場合、理想自己で「とてもそうになりたい」と回答した項目が0の場合、重みづけされた差異得点は算出されない。

Table11 クラスタ別の理想自己の上位項目

CL1	CL2	CL3	CL4
スポーツができる (4.28, 51.7%)	成績が良い (4.79, 84.2%)	友達が多い (4.75, 80.8%)	成績が良い (4.45, 59.0%)
得意な運動がある (4.27, 50.0%)	努力を続ける (4.75, 81.0%)	勉強ができる (4.69, 73.1%)	友達が多い (4.28, 50.6%)
誰とでも気軽に話せる (4.23, 46.6%)	人とうまくつきあえる (4.74, 79.4%)	努力を続ける (4.69, 73.1%)	スポーツができる (4.25, 50.6%)

()内はその項目の平均値と「とてもそうになりたい」と回答した者の割合

Table12 クラスタ別の被期待自己の上位項目

CL1	CL2	CL3	CL4
頭の良い (4.33, 53.4%)	努力を続ける (4.40, 52.4%)	友達が多い (4.60, 64.4%)	成績が良い (4.29, 45.8%)
成績が良い (4.32, 53.4%)	頭の良い (4.42, 50.8%)	思いやりがある (4.56, 59.6%)	努力を続ける (4.24, 43.4%)
勉強ができる (4.30, 50.0%)	勉強ができる (4.41, 49.2%)	努力を続ける (4.55, 59.6%)	頭の追い (4.16, 38.6%)

()内はその項目の平均値と「とてもそうになりたい」と回答した者の割合

Table13 クラスタ別の重みづけされた差異得点

	CL1	CL2	CL3	CL4	全体	F値	多重比較 (Bonferroni)
理想自己と現実自己 の差異	2.23 (.85)	2.43 (.70)	1.92 (.60)	2.38 (.85)	2.20 (.76)	8.18 **	CL2,4>3
期待自己と現実自己と の差異	2.32 (.79)	2.21 (.83)	1.96 (.71)	2.43 (.82)	2.18 (.80)	4.71 **	CL4>3
理想自己と他者自己と の差異	2.31 (.80)	2.40 (.80)	1.84 (.73)	2.36 (.79)	2.18 (.81)	9.77 **	CL1,2,4>3
期待自己と他者自己と の差異	2.08 (.92)	2.06 (.95)	1.81 (.83)	2.20 (.96)	2.01 (.91)	2.36 †	
現実自己と他者自己 の差異	.81 (.55)	.81 (.44)	.76 (.33)	.77 (.49)	.78 (.44)	.24	

** $p<.01$ † $p<.10$

()は標準偏差

現実自己がそぐわない」ということは、周囲の期待を取り込んで作られた理想自己と、他者が自分のことをどのようにみているかというイメージとの間の齟齬を占めているのかもしれない。

さて、伊藤（1992）は同じ理想と現実の差異であっても、もともと差異が大きい者ほどその影響力を受けるこ

とを示している。本研究では、過剰適応の視点から理想、期待、現実それぞれの差異を検討したが、その差異がどのような影響を与えるのかは検討されていない。今後は、本研究結果を踏まえ、残っている項目を分析した上でより包括的に思春期の理想自己と現実自己の意味を探る必要がある。

引用文献

- 秋田県総合教育センター 1998 タイプや状況に応じた不登校児童生徒への対応 総合教育センター研究紀要第30集
- 新井幸子 2001 理想自己と現実自己の差異と不合理な信念が自己受容に及ぼす影響 心理学研究, 72, 315-321.
- 遠藤由美 1992a 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究, 63, 214-217.
- 遠藤由美 1992b 自己認知と自己評価の関係 一重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討— 教育心理学研究, 40, 157-163.
- Harter, Brennick, Bouchev & Whitesell 1997 The development of multiple role-related selves during adolescence. *Development and Psychopathology*, 9, 835-854.
- Higgins 1987 Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-340.
- 古市裕一 1991 小・中学生の学校ざらい感情とその規定要因 カウンセリング研究, 24, 123-127.
- 石津憲一郎 2006 過剰適応尺度作成の試み 日本カウンセリング学会第39回大会発表論文集, 137.
- 石津憲一郎・安保英勇 2007 中学生の抑うつ傾向と過剰適応—学校適応に関する保護者評定と自己評定の観点を含めて— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 55, 271-288.
- 石津憲一郎・安保英勇 2008 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, 56, 23-31.
- 伊藤美奈子 1992 自己受容を規定する理想—現実の差異と自意識についての研究 教育心理学研究, 40, 164-169.
- 三浦正江・福田美奈子・坂野雄二 1995 中学生の学校ストレスとストレス反応の継時的変化 日本教育心理学会第37回大会発表論文集, 555.
- 文部科学省 2010 平成21年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について
- Moretti & Higgins 1990 Relating self-discrepancy to self-esteem; The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings. *Journal of Experimental Social Psychology*, 26, 108-123.
- Moretti & Weibe 1999 Self-discrepancy in adolescence: Own and parental standpoints on the self. *Merrill-Palmar Quarterly*, 45, 624-649.
- 岡田佳子 2002 中学生の心理的ストレス・プロセスに関する研究—二次的反応の生起についての研究— 教育心理学研究, 50, 193-203.
- Rogers, C. R. 1951 Client-centered therapy.; *Its current practice, implications and theory*. Boston: Houghton Mifflin.
- 椎野信治 1966 適応の指標としての自己概念の研究 教育心理学研究, 14, 165-172.
- 庄司一子・林田和恵 2003 「いい子」傾向をもつ子どもの self-control と対人関係 教育相談研究, 41, 49-57.
- 外山美樹・桜井茂男 2001 自己認知と自尊感情ならびに自己意識との関係 筑波大学心理学研究, 23, 161-167.

(2011年8月29日受付)

(2011年10月25日受理)